



TITLE:

京大広報 No. 593

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 593. 京大広報 2004, 593: 1751-1770

ISSUE DATE:

2004-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196505>

RIGHT:



# 京大広報

No. 593

2004. 9

## 目次

### 大学の動き

尾池総長の中国訪問.....	1752
入倉副学長が APRU 第 8 回年次学長会議に出席.....	1752
「京都大学オープンキャンパス2004」を開催.....	1753
平成16年度「21世紀 COE プログラム」の採択結果.....	1754
平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」の採択結果.....	1755

### 寸言

世界の温暖化政策を切り開く科学へ	浅岡美恵.....	1756
------------------	-----------	------

### 随想

大学と成人教育	名誉教授 上杉孝實.....	1757
---------	----------------	------

### 洛書

世界新記録	岩間一雄.....	1758
-------	-----------	------

### 文化交流

大学職員としてアメリカに滞在して	志水麻理.....	1759
------------------	-----------	------

### 栄誉

森 重文数理解析研究所教授が藤原賞受賞.....	1760
平尾一之工学研究科教授らのグループが産学官連携推進会議で経済産業大臣賞を受賞.....	1761

### 話題

京都大学未来フォーラム（第4回）を開催.....	1762
第1回学生・教員教育交流会の開催.....	1762
全学共通教育教務情報システムの名称が KULASIS（クラスリス）に決定.....	1763
「高校生のための化学 - 化学の最前線を聞く・見る・楽しむ会 -」を開催.....	1763

### 訃報

日誌	.....	1764
----	-------	------

### 公開講座

ウイルス研究所学術講演会.....	1767
教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座.....	1767
エネルギー科学研究科公開講座.....	1768
京都大学21世紀 COE「物理学の多様性と普遍性の探求拠点」第2回市民講座.....	1768

### お知らせ

宇治キャンパス公開2004.....	1769
フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地一般公開自然観察会.....	1770

編集後記	.....	1770
------	-------	------



## 大学の動き

### 尾池総長の中国訪問

尾池和夫総長は、8月2日に北京で開催された第3回日中学長会議に出席した。

日中学長会議は、日本の7国立大学と北京大学をはじめとする中国の8大学により、日中両国の高等教育分野における協力の促進を目的として、平成12年10月に東京で開催されたのが発端となっている。第2回には早稲田大学と慶應義塾大学が加わり、平



第3回日中学長会議にて発言中の総長

成15年2月に東京で開催された。

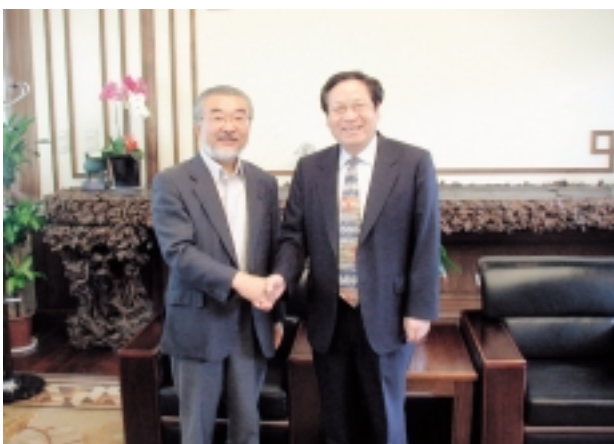
今回は、北京飯店を会場に日本から9大学、中国からは11大学が参加し、「日中の大学間における新たな協力関係の模索」を総合テーマに論議された。このなかで、尾池総長は「国立大学の法人化」と題して国立大学法人制度の概要、目標、課題等について発表した。

会議終了後、西安交通大学長と、翌3日の午前には南京大学副学長と個別に懇談し、さらに午後には清華大学を訪れ、顧秉林学長と意見交換を行った。

8月4日は上海へ移動し、復旦大学を訪問するとともに、同大学の日本研究中心に設置されている京都大学経済学研究科上海センターを視察し、活動状況の説明を受けた。

詳細は総長室ホームページをご覧ください。

[http://www.kyoto-u.ac.jp/uni\\_int/01\\_sou/speech.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/speech.htm)



清華大学にて顧秉林学長と



復旦大学正門前にて

### 入倉副学長がAPRU第8回年次学長会議に出席

入倉孝次郎副学長は、尾池和夫総長の代理として6月24日～25日にチリ大学（チリ共和国サンチアゴ市）で開催されたAPRU（Association of Pacific Rim

Universities：環太平洋大学協会）第8回年次学長会議に竹安邦夫国際交流委員会国際大学連合小委員会委員長（生命科学研究科教授）とともに出席した。





この会議には APRU 加盟大学から21大学の学長ほか関係者59名が参加し、実施事業の評価と新規事業の策定とともに、「高等教育における戦略上の課題」「国際化の現状と将来の展望」「APRU と APEC との連携」等について論議した。特に国際化に関するセッションでは、今年の2月に北京大学で開催の「APRU 国際化ワークショップ」において紹介され

た「京都大学国際シンポジウム」、エネルギー理工学研究所の「日韓拠点大学交流」及び学術情報メディアセンターの「TIDE (Trans-pacific Interactive Distance Education) プロジェクト」をはじめ参加各大学の国際的な教育研究活動の試みが話題の中心となって活発に討議された。

APRU は環太平洋地域の主要大学で構成する国際大学連合で、加盟大学間の相互理解を深めることにより、域内に共通する重要課題（経済発展、都市化、技術移転、大気汚染、資源枯渇など）に対し教育・研究の分野から協力・貢献することを目的に、1997年に設立された。本学は創設時から加盟している。現在はシンガポール国立大学に事務局を置き、16カ国（地域）から36大学が参画している。

## 「京都大学オープンキャンパス2004」を開催

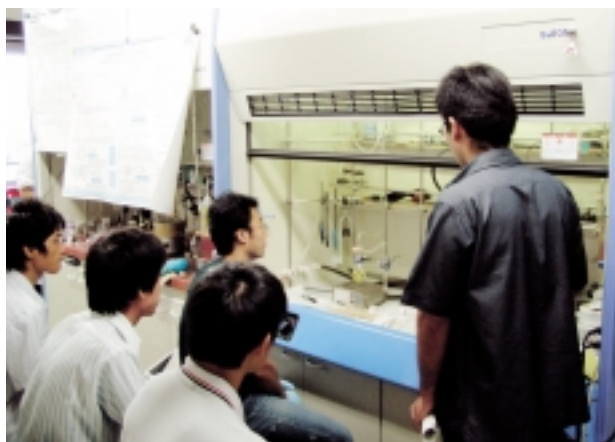
京都大学オープンキャンパスが「感じる日」をテーマに8月17日（火）、18日（水）の両日に開催され、全国各地から高校生、保護者、引率者等を含め2日間で約7,000人が参加し、百周年時計台記念館で行われた全体説明会には早朝から整理券を求める列ができるなど、参加者の本学を目指す意欲がうかがえた。

今年で3回目を迎えるオープンキャンパスでは、初日に総合人間学部、文学部、教育学部、法学部、経済学部及び理学部の6学部、2日目は医学部、薬学部、工学部及び農学部の4学部に分けて学部説明



会を実施した。

全体説明会は百周年記念ホール及び国際交流ホールを会場として、800名の定員で行われ、田口紀子オープンキャンパス小委員会委員長の司会進行により、はじめに東山紘久副学長からオープンキャンパスの趣旨及び目的についての説明があり、続いて尾池和夫総長から「京都大学を目指す諸君へ」と題して、京都大学の歩みと現在そして未来について語られた。その後、京都大学応援団による力強い演舞と受験合格への熱いエールが送られ、参加者から盛大



な拍手があった。最後に在学生からのメッセージとして、初日は大学院教育学研究科修士課程1回生加藤奈奈子さんが、2日目は大学院薬学研究科修士課程2回生の河野博樹さんが、それぞれ自らの体験を熱く語った。両日とも午後には、国際交流ホールにおいて本学の紹介ビデオと午前中に実施した全体説

明会のビデオが参加できなかった人のために放映された。一方、相談コーナーでは入試、学生生活、留学及び就職等の相談や質問に担当職員が対応した。また、附属図書館、総合博物館及び百周年時計台記念館歴史展示室の公開には、それぞれ3,000人を超える見学者があり、在学生のボランティアによるキャンパスツアーも人気を呼んだ。

午後からの学部説明会では、AとBの2回の時間帯を組み、学部長の歓迎の挨拶や模擬講義、施設見学、研究室訪問、相談コーナー等、それぞれの学部企画に見学者は熱心に参加していた。

学部説明会終了後も、それぞれ大学構内を自由に散策したり、カフェレストラン「カンフォーラ」で休息するなど、参加者にとって本学を「感じる日」となった。

## 平成16年度「21世紀 COE プログラム」の採択結果

「21世紀 COE プログラム」は、世界的な研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、文部科学省が平成14年度から開始した事業である。

平成16年度は、過去2カ年で10分野の募集が行われたことから、新たに「革新的な学術分野」で募集があり、7件の計画を申請し、1件が採択された。

この結果、本学は、平成14、15年度の22件に合

せて23の拠点を有し、全学を挙げて拠点形成計画(5年間)を推進していくこととなる。

なお、平成16年度に募集のあった「革新的な学術分野」で採択された全件数は、24大学28件となっている。

詳細はホームページをご覧ください。

[http://www.kyoto-u.ac.jp/kenkyu/02\\_ken/program.htm](http://www.kyoto-u.ac.jp/kenkyu/02_ken/program.htm)

### 平成16年度「21世紀 COE プログラム」革新的な学術分野の採択一覧

分 野	分 科 名	申 請 部 局	プログラム名称	拠点リーダー
革新的な学術分野	応用昆虫学 K - 6	農学研究科, フィールド科学教育研究センター	昆虫科学が拓く未来型 食料環境学の創生	(農学研究科) 藤崎 憲治

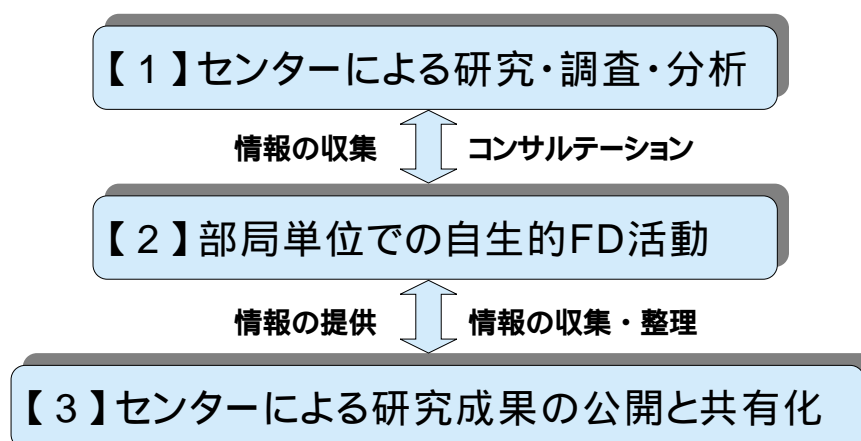
## 平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」の採択結果

平成16年度「特色ある大学教育支援プログラム」の取り組みとして、昨年度の「外国語教育の再構造化 - 自律学習型CALLと国際的人材養成 - 」に続いて、本学の申請した「相互研修型FDの組織化による教育改善」が採択された。2年連続の採択である。このプログラムは、大学教育の改善に資する様々な取り組みのうち、特色ある優れたものを選定し、選定された事例を広く社会に情報提供することで、今後の高等教育の改善に活用するものである。「自由の学風」を理念とする本学では、これまでに様々な

な自生的相互研修型FD(Faculty Development)活動が展開され、これらを支援するシステムも、高等教育研究開発推進センターを中核として開発されてきた。「相互研修型FDの組織化による教育改善」の取り組みでは、この支援システム(概念図参照)を活用して工学部のトータルな相互研修型FD活動を支援し、そこから得られた知見によってシステムを整備・充実させ、これによって全学的なFD組織化と教育改善の前進をはかる。

### 【概念図】

## 相互研修型FD支援システム



## 寸言

## 世界の温暖化政策を切り開く科学へ

浅岡 美恵

その昔、「京都の冬は底冷え」と形容されたように、しんと寒かったものです。修学旅行以来の入試の日は大雪。しばらくして、身体検査に出向いたのですが、身を切るような寒風の中でした。その頃、京都では、「冴え返りまして」と挨拶するのだと教えられました。入学式に桜が間にあわず、それからまた冬がきて、下宿の庭の雪明りに驚いて目覚めたことが何度もありました。40年ほど前のことです。大学紛争での「時計台封鎖」が始まったのも、しんと雪が降り続く夜でした。夏の蒸し暑さよりも冬の記憶が鮮明なのは、私が南国育ちの故かも知れません。



「京の底冷え」が消えてしまったのは何時の頃からだったのでしょうか。80年代終わりから地球温暖化という言葉が注目されるようになり、気候変動枠組み条約に基づいて、1997年12月に京都で国連の温暖化防止京都会議が開かれました。そして、世界で温室効果ガスの排出削減に向かうための京都議定書が採択されたのですが、私はたまたま、卒業後も京都に居つづけたことから気候変動問題に関わりをもつことになりました。

気候変動問題はまさに科学の子といえるでしょう。それまで公害裁判では「科学者」に失望することが少なくなかったものですから、温暖化問題で世界の科学者たちの積極的な役割に驚いたものです。国連に科学者による政府間パネル（IPCC）がつくられ、政策決定に科学を反映させる仕組みができていました。世界の科学者たちが将来を予測し、先見性のある政策決定者や政治のリーダーたちがこれを尊重する。気候異変の兆候を生活感覚で感じ取った世界の市民・NGO たちがそうした科学者たちを後押しし、国際政治を一步進めたといえるでしょう。

ですが、それから7年も経過し、京都議定書はいまだ発効をみていません。わが国のエネルギー政策やエネルギー多消費型の社会経済構造も変わらず、

経済界の抵抗を受けて、社会の仕組みを変えるような温暖化政策の導入をめぐるのは、いまだ入り口での反対論が繰り返されています。米国は自国の経済への悪影響を理由として議定書交渉からの離脱を宣言、米国との間で揺れ動き、批准を口実に非科学的で法的合理性のない主張を国際社会に押しつけて数値目標の再交渉をした日本、温暖化でコスト代を節約できるとかのブーチン大統領の発言や遅れるロシアの批准など、国際政治や国内対策の混乱と膠着状況はまさに現代の国際政治の縮図であり、科学も捻じ曲げられかねないようにも見えます。

そんななかで、京都議定書が、米国一国主義の直撃から辛うじて破局に至らずに維持している最大の要因は、残念ながら、世界の各地で頻発・激甚化、日常化している異常気象だといえるでしょう。今年の日本の夏は平均気温から2度以上も高く、真夏日が40日も続き、IPCC が予測する100年後の平均気温上昇を体験することになりました。気候の異変の新たな段階に至り、人々の日々の挨拶で日常的にその脅威が語られるようになった年として、後世に記憶されるだろうと思います。

今、私たちは、今後数百年を見通して、科学を縦糸として、現在の社会経済システムから人々の意識の変化までをデザインし築いていこうとする壮大な社会実験を行っているといえるのかも知れません。京都大学に新たに開かれた地球環境学堂に集う人々は、自然科学と人間活動をつなぎ合わせた科学の立場から、地球規模での研究の牽引役を担ってきました。この未曾有の挑戦において、京都議定書を生み出したエネルギーを脱温暖化社会に向けて政策選択を促していくエネルギーに高めていくために、多分野横断的な研究者の方々とそこに集まる学生の皆様がその先見性とこれまでにない社会とのかかわり方をもって、社会との接点を広げ、協働の場を創造的に切り開かれることを期待しています。

（あさおか みえ 弁護士・気候ネットワーク代表  
昭和45年法学部卒業）



## 随想

## 大学と成人教育

名誉教授 上杉 孝實

生涯にわたっての教育の重要性は、英国再建省成人教育委員会の1919年報告書でも、1920年代に信州を中心に展開された自由大学の趣意書でも強調されているが、1965年のユネスコにおける提起以来多くの国々の教育政策に影響を及ぼしてきた。成人学生の増加や地域成人教育への大学の貢献など、各国の大学においても、その取り組みは盛んになってきている。



日本の大学の場合、英米の大学のように、成人教育のための専任スタッフを具えた学部を持つことなく今日に至っているが、数少ないとはいえ専任教員を配置した生涯教育学習研究センターを設置する国立大学や、専任教員はいないが事務機構は整えたエクステンションセンターを置く私立大学がふえてきた。たとえ全学的に取り組むとしても、その窓口となり、コーディネートの機能を果たす専門スタッフと機構が必要である。

近年学生の多様化もあって、Faculty Developmentの重要性が指摘されているが、成人学生の増加は、これまでの成人教育の蓄積に学びながらの教育方法の開発を促すものである。確かに多くの成人学生は、参加型の授業に対しては、豊富な人生経験に基づいて、積極的な反応を示し、若い学生にとっても刺激になることが少なくない。

欧米と異なって若年一括採用、年功序列、終身雇用が一般的と思われた日本の雇用形態も、派遣社員の増加のように、流動的になっている。このような形態が進むと、これまでのように教育の可能性を前提として採用し、主に企業内教育で職業教育を行うのではなく、すでにスキルを身につけた者の採用に傾くことが予想され、今以上に教育機関におけるリカレント教育が意味を持つようになるであろう。

以前にくらべて学生が幼くなっているとの声もよく聞かれる。周囲も学生を子どもの延長線上で扱う

ことが多くなっている。その影響であろうか、成人までそのように扱う光景に接して驚いたことがある。ある県と私立大学の連携による、一般成人を対象にした講座で、ある教員が、「あなた達は大学で学ぶのだから、大学生と同じように呼び捨てで出欠を取ります。」といて、名前を呼びあげていったのである。かつてのように、大学に入れば成人というように考えることは困難になっているとしても、成人をそこにはめ込むことでよいのであろうか。成人学生の増加のなかで大学文化の再考は不要であろうか。

大学の教室といえば、階段教室が象徴的である。演習室も堅くて重い長机と椅子が多かった。しかし、成人教育では、輪になったり、小集団に分かれてのワークショップがよく用いられる。したがって机や椅子も移動させやすい軽いものが採用される。大学もしいにそのような設備を必要とするようになってきている。

研究授業といえば、小中高の学校教員の行うものというイメージがあるが、研究とともに教育が重視されるようになり、大学でも他の教員の教授の仕方に学ぶことが重要になってきている。2006年には、縮減された学習内容で学んだ高卒者が大学に入ってくるといので、大学側の対応が課題となっている。すでに入学者あるいはその予定者に補習教育を課している大学もある。いずれにしても、大学は他の学校とは異なり、研究の姿勢を示すことが教育になるとして、教員に特に教育についての力量を問うことが少なかった状況が変わりつつある。少なくとも、成人教育や他の校種の教育にも関心を寄せ、大学としての教育を再構築することが課題になっているといえよう。

(うえすぎ たかみち 元教育学研究科教授 平成11年退官 専門は社会教育・生涯教育)



## 洛書

## 世界新記録

岩間 一雄



アテネ五輪も無事終って、陸上と競泳の記録をウェブで調べて見た。今回は衝撃的な世界新記録という面では若干不作だった様であるが、それでも記録を見ていると幾つかの興味深い事実が浮かび上がってくる。例えば、1位と2位の差が大きな種目として、男子ハンマー投げがある。繰り上げ金メダルの室伏選手が82.91メートル、2位のチホン選手は79.81メートルで、2人の記録の間には4パーセント弱の差がある（ちなみに男子100mや女子マラソンでは0.1パーセント程度）。しかし、上には上があって、女子のやり投げではこの差が何と8パーセントにまでなってしまう。両方とも投擲種目で、それが何を意味するかは若干複雑だが、例えばマラソンにこの8パーセントを当てはめると10分以上になるのだ！

世界記録がスポーツだけのものではないのは当たり前で、競争のあるところ常に付きまとう。計算機科学も例外ではない。「アルゴリズム」という言葉は最近では多くの方がお聞きになっていると思うが、要するに計算機で何か問題を解くときの「手順」のことである。例えば、100枚の答案を採点して順位が丁度真ん中（つまり50番目）の人の得点（中央値と言って統計ではしばしば重要）を求めたいとする。順番に見ていって、まず1番（最高点）の人を見つけて、次に2番の人を見つけて、と続けていって50番目の人にたどり着くという方法（アルゴリズム）は残念ながら効率が良くない。効率の良い方法に比べるとすぐに100倍、1000倍という差がついてしまう。効率の良いアルゴリズムを探すのは正に速さ競争で、陸上競技ほどシンプルではないにしても、世界記録が当然存在するのである。

別種の問題を見てみよう。自転車で百万遍から出発して、壬生寺、平安神宮、二条城、清水寺、北野天満宮、京都御苑、佛光寺を全て回って百万遍に帰ってくるのに、走行距離を最少にするためにはどの順序で回れば良いか、という問題である。この問題は、ひとつ順番を決めてしまえば（例えば上に上げた順番で回ると決めてしまえば）後は2つのポイ

ント間の最短路（例えば平安神宮から二条城への最短路）を求めるのは難しくない。あくまで順番を決めるのが難しいのである。しかし、精々8個所と考えれば、全ての順番を総当たりに調べても高が知れている。昔習った順列をおぼえておられるなら、約4万通りを調べれば良いので、現在の計算機にとってはたやすい。ただ、この回る場所の数が増えてくると（例えばコンビニの配送車を想像して欲しい）この「総当たり法」は急激に計算時間が増えて破綻してしまうのである。如何にして無駄な探索を避けるかが勝負なのだ。

重要な問題に対して現在の最高速アルゴリズムを改良する、つまり世界新記録を達成することは、研究成果として非常に分かりやすく称賛される事が多い。我々の研究室では最近2つの新記録を達成したが、ひとつは充足可能性問題と呼ばれる基本的問題のひとつに対してである。総当たりでやるとおよそ2の $n$ 乗の計算時間がかかる（ $n$ は問題のサイズ、上記の回る場所の数の様なものと考えてもらえば良い）。これを例えば、1.5の $n$ 乗にできれば、計算時間の大きな節約になる、つまり、 $c$ の $n$ 乗の $c$ の値を競うのである。我々は去年の秋にこの $c$ の値として1.324を達成し、数ヵ月前にでた1.329を約0.4パーセント改良することに成功した。なお、この記録は現在も破られておらず、この分野ではかなり長命な方である。また、論理回路の素子数の下限という問題でも記録を持っていて、こちらは、 $5n$ という記録で、従来の $4.5n$ を改善した。（この場合は値が大きい方が良いので、前述の投擲競技に相当する。また、改善の度合いが10パーセントと大きいのも偶然の一致なのだろうか...）

ウェブの検索エンジンであるGoogleの成功はアルゴリズムの力によるところが大きいと言われている。諸外国では数学好きの高校生のかかなりの部分がアルゴリズムの世界に入ってくるというなかで、わが国でもそうした高校生を魅了できるような研究・教育環境を作っていく事が急務である。

（いわま かずお 大学院情報学研究科教授 専門：アルゴリズムと計算量理論）

## 文化交流

## 大学職員としてアメリカに滞在して

志水 麻理

平成15年6月から1年間、文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラムに参加し、アメリカの大学に滞在しました。この研修は、国立大学職員の英語能力向上及び国際交流事業理解を目的とするもので、今年は全国の国立大学から11人が参加しました。研修の前半は、全員が Montana State University にて英語とアメリカ高等教育制度の講義を受け、後半は参加者が別々の州立大学でインターンとして研修を行いました。

私は、後半の半年間を、サンフランシスコから車で1時間半の場所にある University of California, Davis (カリフォルニア大学デービス校) で過ごしました。デービス校では、国際担当副学長のオフィスにパソコン付きの個室を与えられ、副学長補佐がスーパーバイザーになってくれるという大変よい環境に恵まれ、学内の様々なオフィスでインタビューを行ったり、ミーティングに参加したりして、アメリカの大学経営のあり方を学びました。中でも印象に残ったのが、プロ並みの広報戦略でした。Public Communication Office では、元 CNN のキャスターやピューリッツァー賞もとったことのある元 New York Times の記者がスタッフとしてデービス校のニュース番組をつくり、大学新聞を編集しています。そして、彼らによるメディア・トレーニングを大学経営陣は必ず受講し、取材を受ける際の服装や話し方等を指導されます。特に、学長には専属の広報担当者



カリフォルニア大学デービス校のキャンパス



サンクスギビングに訪れたサンタフェの街角

があり、どこへ行くにも随行して学長の発言や演説にアドバイスをしていました。また、予算獲得のための戦略にも驚きました。個人、財団、企業等に寄付依頼をするオフィスでは、ターゲットの関心や財力などを研究員達が調べ上げ、的を絞った寄付獲得戦略を展開しています。また、シュワルツネッガー知事が高等教育予算削減案を出した途端、UC (カリフォルニア大学) 全キャンパスで予算獲得キャンペーンを掲げ、州民にUCの必要性を訴える集会を開催したり、州議員を学内の音楽会へ招待したりしていました。このように、アメリカの大学は優れたスキルをフル活用して積極的に社会にアピールして資金を得ることに長けており、その経営手腕は確かに目を見張るものがありました。

しかし、どの国にもそれぞれの社会システムがあり、教育制度があり、そして高等教育があります。「知識」ではなく「財力」を尊ぶアメリカ人の価値観、教育は地域住民の責任だという徹底した地方分権の概念等が根底にあるアメリカの教育制度、そしてそれを生み出したアメリカ社会を考えることなく、アメリカの大学の優れた点だけをクローズアップすることはできないとも感じました。

滞在中、ワシントン D.C. にある国務省や教育省を訪問し、博物館・美術館巡りをしました。N.Y. では五番街でショッピング、ブロードウェイでミュージ

カルを楽しみました。その一方で、モンタナでネイティブ・アメリカンの reservation (居留区) へ行き、深刻なアルコールとドラッグの問題、失業率60%という貧しさを目の前にして呆然としたことは忘れられません。アトランタでは、鉄格子と防弾ガラスに囲まれたファーストフード店でホームレスに脅されて怖い思いをしました。私が見たアメリカは、日本では想像できなかった富と貧困、希望と絶望が混沌と渦巻く、光と影のある国でした。

そんな国での1年間は、多様な人種、文化、価値観の中に身を埋め、それがいかに素晴らしく、そして難しいかを知った日々でもありました。異なるものとの接触は、不和や対立というリスクも背負います。しかし、そのような負の部分を知り、それでも

大学の国際交流が大切だと強く思うようになったのもまたアメリカに行ったからでした。忘れられないのは、デービス校学長が1979年の革命以来国交のないイランの大学を訪問したことです。革命前にデービスで学んだイラン人留学生達が今や母国で大学教授となり、学長一行を歓迎したのです。イランの同窓生に囲まれた笑顔のデービス校学長の写真には、学術交流は時に政治やイデオロギーを越えて人間同士の結びつきを生み出すのだという希望を見出しました。そして今、そんな可能性を秘めた大学という場所で、自分自身が国際交流の仕事に携われることをとても嬉しく思っています。

(しみず まり 研究・国際部国際交流課職員)

## 栄誉

### 森 重文数理解析研究所教授が藤原賞受賞

第45回藤原賞が藤原科学財団より数理解析研究所森 重文教授に授与され、6月17日に東京学士会館において贈呈式が行われた。同賞は1960年から自然科学の優れた研究者に贈られ、物理・数学、工学、化学、生物・農学、医学の5分野から毎年二人が選出される。



森教授は昭和48年京都大学理学部数学科を卒業、同50年に同大学大学院理学研究科修士課程を修了、同50年同大学理学部助手、同55年名古屋大学理学部講師、同57年同助教授、同63年同教授を歴任の後、平成2年より京都大学数理解析研究所教授に就任、基礎数理研究部門を担当している。

森教授は代数幾何学を専攻し、理学部助手であった1979年に Hartshorne 予想と呼ばれる問題を解決

して脚光を浴びた。これは射影空間と呼ばれる基本的な代数多様体を代数的な正曲率性でもって特徴付けるもので、微分幾何学や複素多様体の分野などからも大きく注目され、1983年に日本数学会彌永賞を受賞した。

その後、森教授はこの予想解決の手法を発展させて1982年に端射線の理論を発表した。これは代数幾何学の多くの問題に応用されたが、高次元代数多様体の双有理分類、すなわち、代数多様体の世界の大まかな地図作りという代数幾何学の中心問題にも道を開いた。ここで指し示された構想は「極小モデルプログラム」や「森プログラム」と呼ばれ、世界中の多くの秀れた研究者の参加の下に発展していった。森教授自身は「フリップの存在」というその中の超難問に挑み、1988年に3次元の場合を解決。この業績により日本学士院賞(1990年)やフィールズ賞(1990年)等の高名な賞を授与された。



代数幾何学の主対象である代数多様体は、次元の高い空間の中で代数方程式の系で記述される点の集合のことである。ありふれた対象であるが、その扱いは一筋縄ではいかない。広中平祐本学名誉教授による特異点解消もその基礎理論の一つであるが、森教授の理論は代数多様体から真に重要な情報を抽出

するものとして、現代代数幾何学の古典となって大きな影響を与え続けている。今回の受賞が同理論のさらなる発展・普及の契機となって、両教授に続く研究者の輩出を期待したい。

(数理解析研究所)

## 平尾一之工学研究科教授らの研究グループが産学官連携推進会議で経済産業大臣賞を受賞

平尾一之工学研究科教授(材料化学専攻)らの研究グループが、平成16年度産学官連携功労者表彰経済産業大臣賞を受賞した。去る6月20日に、約4,000人の関係者出席のもと、国立京都国際会館で開かれた第3回産学官連携推進会議(内閣府、総務省、文科省、経産省、日本学術会議等15機関共催)において、表彰・研究発表が行われた。

今回の選考では、NEDO技術開発機構の委託事業「ナノガラス技術プロジェクト」として平尾教授らが推進する、京都大学、独立行政法人産業技術総合研究所及び社団法人ニューガラスフォーラムとの共同による次世代DVDの研究開発の成果が高く評価され、437件の応募の中から選ばれた。

DVDは青色レーザーを光源にした記憶容量27ギガバイトが実用化されつつあるが、さらなる大容量化には波長の短い紫外光が光源に必要で、研究開発に時間とコストがかかるとされてきた。平尾教授ら

は、スパッター装置を使い、超微粒子の酸化コバルトとガラスが蜂巢状に並んだ厚さ約70ナノ(10億分の1)メートルの薄膜をDVDの表面に形成した。青色レーザーを当てると、薄膜がレンズになり、レーザーのビーム面積を4分の1に絞り込むことが分かった。記憶面積が小さくなることで、現行の4倍となる100ギガバイトを実現し、紫外光なしでもDVDが大容量化できる実用化への道を拓いた。

平尾教授は、昭和49年京都大学工学部を卒業後、同大学大学院工学研究科修士課程及び博士課程を修了され、同研究科助手、助教授を経て、平成10年教授に就任され、無機材料化学講座を担任されている。また、福井謙一記念研究センター副センター長を務められている。この間、平成10年に日本セラミックス協会学術賞、同12年に日本化学会学術賞、米国セラミックス協会モーレイ賞等を受賞されたほか、米国セラミックス協会からフェローの称号も授与された。

この成果を基に、同プロジェクトに参画する日立製作所との産学官連携で次世代DVDの実用化が進められており、今後、日本経済への貢献が期待される。

(大学院工学研究科)



受賞講演をする平尾教授



## 話題

## 京都大学未来フォーラム（第4回）を開催

京都大学では、大学と社会との協力・連携を一層深めるため、社会の各界で活躍する卒業生などを迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムを、百周年時計台記念館・百周年記念ホールにおいて開催している。

7月9日（金）開催の第4回目は、経済学部入学後に比叡山に入山され、出家得度後、比叡山での12年籠山行を満行され、現在は、天台宗立大学叡山学院院長、比叡山泰門庵住職として活躍されている堀澤祖門氏を講師に招き、「現代の混乱について - 仏教はどうみるか - 」と題して講演が行われた。

講演では、現代社会において対立と殺戮が果てしなく繰り返されていることについて、こうした現象が何故起きてくるのか、その根本原因は何か、という問いについて仏教の開祖ブッダの四諦（人生に関する四つの真理）の教えから話があった。この世の中が苦に満ちているという現実を直視し、その苦を引き起こすには必ず原因があり、それは自我に対する執着から引き起こされていることを述べた。この現実の解決策として、人間が持つ知性である「理性」



とともに、新しく人間の一つとして獲得したい知性を現した言葉として「慧性」を提案され、「慧性」の獲得と「空」の理解が現代社会を苦の解決に導くことができると、参加された方に語った。

聴講した学生、教職員、一般市民の方々240名は講演に真剣に聞き入り、講演終了後は参加者から、どのように生きることが大切なのか、仏教の言葉の意味など熱心な質問が相次ぎ、有意義なフォーラムとなった。

## 第1回学生・教員教育交流会の開催

高等教育研究開発推進センターは、7月10日（土）、吉田南構内吉田南1号館において、教員及び学生約70名の参加を得て、「あなたは京大に何を求めますか？」をメインテーマとする第1回学生・教員教育交流会を、高等教育研究開発推進機構の後援により開催した。



この交流会は、学生・教員の共同参画・相互評価を基調として、伝統的な自由の学風を継承した新しい京都大学の教育のあり方、さらには学生の知の探求の仕方を考えるために発足したプロジェクトである。今回の具体的な内容については、学部生・大学院生14名による学生企画委員が中心となって企画さ



れた。

交流会は、吉田 純高等教育研究開発推進センター教授の司会進行により、今回のテーマに関し、林 哲介高等教育研究開発推進機構副機構長から「いまなぜ交流会なのか!」、及び高橋由典高等教育研究開発推進センター教授から「教養教育とは何か：- 教養教育に関する人間・環境学研究科・文系群会の考えを語る -」の話題提供に続いて、大学院理学研究科博士後期課程佐藤和彦氏による分科会に向けての論点整理があった。

その後、「学生と教員のコミュニケーション」、「学生・教員の意識改革」及び「京大らしい教育とは何

か」の三つの分科会に分かれて、学生・教員による討論が行われた。分科会終了後の各分科会の報告並びに全体討論のなかで、本交流会の今後について、内容を一層充実したものにして引き続き開催することが確認された。

今回の交流会は、終始活発な議論、意見交換がなされ、予定時間をオーバーするなど盛会のうちに終了した。また、交流会終了後開催された懇親会においても多数の学生・教員が参加し、一層の交流を深めた。

(共通教育推進部)

## 全学共通教育教務情報システムの名称が KULASIS (クラシス) に決定

高等教育研究開発推進機構では発足以来、学生への全学共通科目に関する情報伝達やシラバス公開、さらには履修登録などの電子化を目的とした全学共通教育教務情報システムの開発に取り組んでいる。本年4月より、学外からも Web で全学共通科目情報を閲覧することが可能となっている(全学共通科目専用 ID・パスワード要)。

今回、このシステムの名称を募集したところ、75件の応募があり、厳正なる審査の結果、農学部1回生大塚恭平さんの KULASIS(クラシス)が採用となった。KULASIS とは、Kyoto University's Liberal Arts Syllabus Information System(京都大学全学共通教育教務情報システム)を意味している。これを記念して、7月12日に、丸山正樹機構長より大塚さ



んへ記念品として図書券が贈呈された。

(共通教育推進部)

## 「高校生のための化学 - 化学の最前線を聞く・見る・楽しむ会 -」を開催

化学研究所では、7月31日(土)に宇治キャンパスにおいて、中高生を中心に化学の最前線を聞いて、見て、楽しんでいただく機会を提供することを目的に見学会を開催した。今回は7回目で、参加者は110名を超え、その約8割と1割が高校生と中学生であり、残りは教諭、保護者、大学生であった。また府県別では京都、奈良、大阪、兵庫などの近隣だ

けでなく、千葉、静岡、広島、鳥取、愛媛、宮崎などからの参加もあった。

参加者は午前、午後ともに6サイトから1サイト選択し、見学・体験し、一般にはほとんど目にするののできない物質や実験装置・施設を使って化学の楽しさを体感してもらった。参加者のアンケート調査では、「学校だけではできない実験等ができて



とても楽しかったです。」「先端化学にふれると化学の受験勉強の意味も大いにあると感じられる。」「高校生が興味をもてるように工夫してくれた。」などの嬉しい声を聞くことができた。

(化学研究所)

## 訃報

このたび、<sup>まつうら</sup>松浦 <sup>てるお</sup>輝男名誉教授、<sup>まつした</sup>松下 <sup>せんきち</sup>千吉名誉教授、<sup>なかまつ</sup>中松 <sup>ひろひで</sup>博英化学研究所助手、<sup>きたお</sup>北尾 <sup>こういちろう</sup>弘一郎名誉教授、<sup>といた</sup>箕田 <sup>ともよし</sup>知義名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

### 松浦 輝男 名誉教授



松浦輝男先生は、5月27日逝去された。享年79。

先生は、昭和24年大阪大学理学部化学科を卒業後、大阪市立大学理工学部化学科助手、同助教授、同38年京都大学工学部合成化学教室助教授を経て、同年教授に就任され、遊離基合成化学講座を担当された。平成元年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、平成2年4月から平成8年3月まで龍谷大学理工学部教授を務められた。

先生は、天然物化学の研究に永年取り組まれ、いちはやく生体内モデル反応を天然物化学の分野に持

ち込み、後に世界的に大きく発展した生体類似反応による天然物合成という新しい学問分野の開拓に多大な貢献をされた。有機合成に光反応を取り入れるといういわゆる有機光反応に日本でいち早く取り組み、多くの業績を挙げられた。特に、核酸などの生体分子の光化学や固相光反応の研究では、世界を代表する立派な業績を挙げられた。また、学外にあっては、光化学協会、日本光生物学協会の会長を歴任するとともに、関連学協会の発展に多大の貢献をされた。

これらの業績に対して、昭和60年米国国立衛生研究所(NIH)よりフォガティスカラーシップを受けられた。

(大学院工学研究科)



## 松下 千吉 名誉教授



松下千吉先生は、7月1日逝去された。享年74。

先生は、昭和28年3月に島根大学文理学部を卒業後、同年4月京都大学大学院文学研究科修士課程、同30年4月同大学同大学院博士課程に進学。昭和33年3月同博士課程を単位取得退学後、直ちに大谷大学助教授とられた。翌昭和34年2月に大谷大学を辞し、京都大学教養部講師、同35年6月同助教授を経て同54年10月同教授に昇任された。停年まで1年を残し平成4年4月に退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。教養部在任中は、英語教育の充実はもとより、

人事委員、財政委員等を歴任、大学管理運営にも貢献された。

本学退官後は、平成4年4月から同15年3月まで英知大学文学部教授として引き続き教鞭をとられ、若い研究者育成にご尽力された。

先生のご専門はイギリス文学とくに18世紀後半から19世紀前半にかけてのイギリス・ロマン主義詩人たちである。とくにウィリアム・ワーズワス研究で知られている。主著『ワーズワス考 - 人(間)・自然・唯一者』(1996)所収の「歓びの静謐と生動」と題された「Glee」考はいまだにその新鮮な輝きを失っていない。

(大学院人間・環境学研究科)

## 中松 博英 化学研究所助手



中松博英先生は、7月1日逝去された。享年48。

先生は、昭和54年大阪大学理学部化学科を卒業し、同56年同大学院理学研究科前期課程を修了後、大阪大学産業科学研究所技官を経て、平成元年より京都大学化学研究所助手に就任。平成8年分子軌道法を用いたX線吸収スペクトルの理論的研究により京都大学博士(理学)を授与され、同10年より一年間米国ノースウエスタン大学に留学して分子軌道法の材料科学への応用についての研究に取り組まれた。

先生の業績は主としてDV-X法という分子軌道

法を駆使した物質の電子状態の理論的研究で、X線吸収・発光スペクトル及び光電子スペクトルの解析や相対論的DV-X法による重元素の化合物の電子構造などに関して世界の学術雑誌に多くの論文を発表している。またこれらの研究を通して得られた様々な物質の電子状態に関する情報を新しい機能性を持った材料等の設計・開発に応用することを試みられた。こうした業績と学会への貢献により平成16年度には「DV-X法の発展ならびにその材料科学への展開」でDV-X研究協会特別賞を受賞された。

(化学研究所)

## 北尾 弘一郎 名誉教授



北尾弘一郎先生は、7月20日逝去された。享年93。

先生は、昭和9年京都帝国大学農学部を卒業、同大学化学研究所研究員、日東紡績株式会社勤務、京都帝国大学木

材研究所助教授を経て、同30年同教授に就任、木材化学部門を担当された。昭和50年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和45年5月から同47年5月まで木材研究所長および京都大学評議員として本学の管理運営に貢献された。



終戦末期の研究所では全てが劣悪な環境下にあつて、先生は宇治の火薬製造所跡に研究の場を求め専従教官として木材化学分野の整備、木材研究所の発展に力を尽くしてこられた。先生の研究領域は、パルプ随線細胞の樹脂、広葉樹および竹のヘミセルロース、熱帯材のポリフェノール、テルペン等木材化学の広範な分野にわたるが、特に広葉樹材およびその成分の有機化学的研究に注目し、この分野の先

駆的役割を果たされた。学会活動はその活動の場を日本農芸化学会、日本木材学会、日本材料学会（木質材料委員会）を中心に重ねてこられ、これらの学会の発展に多大な功績を残された。本学退官後は、写真、絵画等文化面にも傾倒された。数多くの後進の研究者が育ち、今もなお先生の高潔な人柄とそこ

（生存圏研究所）

## 笈田 知義 名誉教授



笈田知義先生は、8月15日逝去された。享年77。

先生は、昭和23年京都大学文学部哲学科を卒業、同年京都師範学校勤務、同25年京都学芸大学助手に配置換え、同29年関西大学助教授、同36年同教授、同41年京都大学教養部助教授を経て、同43年同教授に就任された。平成2年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和49年から同51年まで評議員、同50年から51年まで教養部長、同61年から63年まで京都大学学生部長を務められ、大学と教

養部の管理運営に貢献された。

本学退官後は、平成2年から同9年まで富山県立大学工学部教授として引き続き教鞭をとられ、その間、学生部長も務められた。

先生の専門は、旧制高等学校の研究、及び幼児教育の実践的研究である。旧制高等学校の研究では二冊の主著によって、この領域の新しい流れを作られ、幼児教育については、教育学、心理学、保育学及び実践者の共同研究を一貫して進められた。特に幼児教育と教育史の領域において多数の若手研究者を育成された。

（大学院人間・環境学研究科）

## 日誌 2004.6.1 ~ 7.31

- |                  |  |
|------------------|--|
| 6月7日 役員会         | 21日 名誉教授懇談会  |
| 8日 教育研究評議会       | " 役員会（役員懇談会のみ）   |
| " 部局長会議          | " 永年勤続者表彰  |
| " 人事審査委員会        | 22日 教育研究評議会  |
| 9日 人権に関する研修会     | 23日 入学者選抜方法研究委員会                                       |
| 10日 図書館協議会       | " 経営協議会  |
| 11日 入学者選抜方法研究委員会 | " アメリカ、Lawrence B. Coleman カリフォルニア大学研究担当副総長 他1名、総長他と懇談 |
| 14日 学生部委員会       | 28日 役員会  |
| 15日 役員会          | 29日 人事審査委員会  |
| 16日 国際交流会館委員会    | 30日 総長、職員組合との懇談  |
| " 国際交流委員会        |  |
| 17日 創立記念行事音楽会    |  |
| 18日 創立記念日        |  |

7月2日	同和・人権問題委員会	14日	大学入試センター試験実施委員会
"	入学者選抜方法研究委員会	"	総長，インドネシア訪問（19日まで）
5日	役員会	20日	役員会（役員懇談会のみ）
6日	部局長会議	"	教育研究評議会
7日	人事審査委員会	21日	国際交流委員会
12日	役員会	26日	役員会（役員懇談会のみ）
"	学生部委員会	28日	環境保全委員会

## 公開講座

### ウイルス研究所学術講演会

1. 日 時：10月5日（火） 13：00～17：00
2. 場 所：京大会館101号室  
（京都市左京区吉田河原町15 - 9 TEL 751 - 8311）
3. 演題及び講師：エイズウイルス病原性分子の解明 小柳 義夫（京都大学ウイルス研究所）  
ポリオウイルスの病原性発現機構 野本 明男（東京大学大学院医学系研究科）  
CD1・脂質抗原提示系が担う生体防御機構の研究～その現状と未来～  
NKT細胞による免疫制御機構 杉田 昌彦（京都大学ウイルス研究所）  
谷口 克（理化学研究所）  
免疫・アレルギー科学総合研究センター）
4. 受 講 料：無料（申込不要）
5. 問い合わせ先：ウイルス研究所総務掛 TEL：751 - 4003  
詳細はホームページをご覧ください。  
[http://www.virus.kyoto-u.ac.jp/virus\\_public.html](http://www.virus.kyoto-u.ac.jp/virus_public.html)

### 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座

「ラカンとデカルト ～ラカンの精神分析はいかにデカルト的か？～」

1. 日 時：10月17日（日） 13：00～17：00
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール
3. 講 師：ピーター・ヴィトマー（京都大学客員教授）  
河合 俊雄（京都大学助教授）
4. 対 象：心理臨床関係者，市民一般
5. 受 講 料：5,200円
6. 定 員：60名（先着順）
7. 申 込 締 切：9月30日（木）
8. 問い合わせ先：教育学研究科附属臨床教育実践研究センター TEL：753 - 3052  
申込方法など，お問い合わせください。

## エネルギー科学研究科公開講座

「エネルギー科学の新展開」～技術、社会、環境の接点を求めて～

1. 日 時：11月6日（土）13：00～16：30
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール
3. 演題及び講師：エネルギー消費量を減らす - 社会科学からの接近 - 教 授 手塚 哲央  
エネルギー機器と高温設計 - 材料評価技術の最前線 - 助教授 今谷 勝次  
環境負荷と電脳都市化 - 環境と技術の調和を目指す - 教 授 野澤 博
4. 受 講 料：5,200円
5. 申 込 締 切：10月20日（水）
6. 問い合わせ先：工学研究科等学術協力課研究協力掛  
TEL：383 - 2056  
E-mail：kenkyo@adm.kogaku.kyoto-u.ac.jp  
申し込み方法等，詳細はエネルギー科学研究科ホームページをご覧ください。  
[http：//www.energy.kyoto-u.ac.jp/](http://www.energy.kyoto-u.ac.jp/)

## 京都大学21世紀C O E 「物理学の多様性と普遍性の探求拠点」

## 第2回 市民講座「宇宙と物質の神秘に迫る ～物理科学最前線～」

1. 日 時：11月7日（日） 13:00～17:00
2. 場 所：京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール
3. 演題及び講師：特集テーマ「量子の世界」
- 超ひも理論：究極の自然法則がみつかった？！
- |              |       |
|--------------|-------|
| 理学研究科教授      | 川合 光  |
| 基礎物理学研究所教授   | 佐々木 節 |
| 国際融合創造センター教授 | 前野 悦輝 |
- 宇宙はどうやって始まったか？
- 超伝導の不思議
- なお講演終了後、17:30～18:30に、講師の方々と歓談できる簡単な茶話会（会費500円）を、百周年時計台記念館会議室 にて開く予定です。（茶話会にご参加下さる方は、事前に事務局までお申し込み下さい。）
4. 対 象：中高校生以上
5. 受 講 料：無料
6. 定 員：500名（申込多数の場合は、申込ハガキまたは電子メール先着順）
7. 申 込 方 法：往復ハガキまたは電子メールに、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、茶話会への出席希望、を記入の上、下記にお送りください。
- 〒606-8502
- 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院理学研究科 物理学第二教室内
- 京都大学21世紀 COE 市民講座「宇宙と物質の神秘に迫る」係
- TEL：753-3758 E-mail：shimin@cr.scphys.kyoto-u.ac.jp
8. 申 込 締 切：11月1日（月） 必着 定員オーバーの節はご了承ください。
- 詳細はホームページをご覧ください。
- <http://physics.coe21.kyoto-u.ac.jp/>

## お知らせ

宇治キャンパス公開2004  
住みよい地球を創る科学

日 時 10月1日(金) 13:00~16:30  
10月2日(土) 9:30~16:30

## 総合展示

会 場: 化学研究所 共同研究棟 1階

## 公開ラボ

会 場: 宇治キャンパス内の各研究所・センター・研究科の施設及び  
防災研究所宇治川オープンラボラトリー  
(防災研究所宇治川オープンスペースラボラトリーは10月2日(土) 10:00~16:00)  
公開の日時は、プログラムにより確認願います。

## 公開講演会

日 時: 10月2日(土) 10:00~12:00

会 場: 化学研究所 共同研究棟 1階大セミナー室

定 員: 250名

参 加 費: 無料

演題及び講師: 「世界遺産を地すべりから守るために」 防災研究所 教 授 佐々 恭二  
「環境にやさしいエネルギーを創る材料科学」  
エネルギー理工学研究所 講 師 檜木 達也  
「時計で地球環境モニター」 生存圏研究所 教 授 津田 敏隆

## 化学研究所公開講演会

日 時: 10月2日(土) 14:30~16:10

会 場: 化学研究所 共同研究棟大セミナー室

参 加 費: 無料

演題及び講師: 「タンパク質の形から個性へ - 構造生物学の面白さ」 化学研究所 教 授 畑 安雄  
「元素化学の新展開~新しい結合を創る」 化学研究所 教 授 時任 宣博

## 生存圏研究所公開講演会

日 時: 10月2日(土) 13:00~16:40

会 場: 生存圏研究所 木質ホール 3F 大ホール

参 加 費: 無料

演題及び講師: 「植物を使った地球環境浄化は可能か」 生存圏研究所 教 授 矢崎 一史  
「大型レーダーで高層大気の謎解きに挑む」 生存圏研究所 教 授 深尾昌一郎  
「木材から宇宙で使える材料へ」 生存圏研究所 講 師 畑 俊充  
「宇宙太陽発電所SPSによる生存圏の拡大」 生存圏研究所 助教授 篠原 真毅



主 催 京都大学宇治キャンパス公開2004実行委員会

問い合わせ先 宇治地区事務部研究協力課研究協力掛

TEL : 0774 - 38 - 3353 FAX : 0774 - 38 - 3399

E-mail : kenkyo@uji.kyoto-u.ac.jp

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.uji.kyoto-u.ac.jp/open-campus/open-campus.htm>

## フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地 一般公開自然観察会「晩秋の里山を楽しもう」

1. 日 時 : 11月20日(土) 10:00~15:00(雨天決行)
2. 場 所 : フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地(京都市北区上賀茂本山2)
3. 定 員 : 50名(申込多数の場合は抽選)
4. 参 加 費 用 : 無料
5. 申 込 方 法 : 往復はがきに住所, 氏名, 年齢, 電話番号を記入のうえ, お送りください。
6. 申 込 締 切 日 : 10月22日(金)《必着》
7. 問い合わせ先 : フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地  
TEL : 781 - 2402 FAX : 723 - 1262  
E-mail : kamigamo@kais.kyoto-u.ac.jp  
詳細はホームページをご覧ください。  
<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/kami/>

### 編集後記

京都大学も法人化して、はや半年がたとうとしている。京大広報は、法人化後も継続が決まり、あまり大きな変化はない。法人化ということもあってか、京都大学はここ数年、建築、改築ラッシュである。時計台を初め、多くの建物が新しくなった。教養のキャンパスも次々に新しい建物が建ち、私の学生時代の教養部の面影は全くない。阪神大震災を契機として、古くなった京都大学の建物を耐震構造にしていく必要に迫られたことも一因だと思われる。私は阪神大震災ですぐ思い出すことがある。震災直後、トン・コープマンのチェンバロリサイタルをシンフォニーホールで聴いた。彼は、震災でなくなった人のためにといてアンコールでバッハのフランス組曲5番のサラバンドを演奏した。静かで、心の奥底に沈んでいくような演奏だった。涙が流れた。

(根岸記)